茶の湯の近代と俳句の近代

小谷　晴勇

私見によれば茶の湯の歴史とは衰退の歴史である。こういわなければならないのは残念なことである。筆者はそれを第三者的に傍観することでよしとするものではない。なんとかしたいのである。

茶道研究の第一人者、熊倉功夫はその著書を、茶人は孤独である、という言葉で書きはじめている（『茶の湯』教育社、一九七七）。現在、茶道人口は五百万人といわれている。かつて、これ以上茶道が大衆化した時代はなかった。にもかかわらず、茶人は孤独なのである。サラリーマンが居酒屋で酒を飲みながら茶の湯が話題になることはない。ならばＯＬならば事態は変わるか？ＯＬならば茶の湯を習っている人も比較的多いであろう。だが、茶の湯はＯＬの話題にもならない。なぜならば、彼女たちのほとんどは生きがいとして茶の湯をやっているのではないからである。教養を身につけるからとか、礼儀作法を身につけるからとか、そういう次元で茶の湯を習っているからである。茶の湯を、本当の生きがいとしてやっていて、それなしでは生きて行けないという人は、本当に少ない。そういう人が五百万人のうち何人いるだろうか。

しかし、茶人が孤独であるのにはそれなりの歴史的な経緯があり、理由がある。本稿ではまずそれについて論じ、そののち茶の湯と俳句（一般的に両者はそれぞれ日本の代表的な芸能と文芸としてみなされている）を比較する。そのことによって、茶の湯を衰退から救い、活性化させるヒントをつかみたい、というのが小論の目論見である。

一　茶の湯から茶道へ

茶道という言葉は千利休の生きた安土・桃山時代のものではなく、江戸時代につくられて一般化した言葉である。茶の湯から茶道へ。これが茶の湯の衰退の歴史の端的な表現である。生きがいとしての

茶の湯は、儀礼としての茶道に変質した。

茶の湯の黄金時代は、利休の時代である。しかし江戸時代の初期にはずいぶんとおもしろい茶の湯がおこなわれていた。利休の一番弟子たる古田織部は、師匠ゆずりの自由奔放な茶の湯をおこなって、「かぶき」の織部ともいわれることがある。これは彼の茶の湯の一面を強調した評価にすぎないが（建築家村野東吾は織部を単純化して評価しすぎた）、それを否定する事もまたできない。

十八世紀に如心斎千宗左という茶人が出現する。利休の七代目の孫で千家の本家である表千家の宗主、家元であった。（ちなみに、茶の湯の家元制度が確立するのは江戸時代にはいってからである。）如心斎は、花月という茶の湯の上達のための遊びをつくった。このころから茶の湯がだんだんと、たんなる遊びとなってくる。茶道という言葉も広く使われるようになる。

明治時代となると、茶道受難の時代が始まる。茶道をささえていた大名・武士階級が没落する。そして、世の中が日本の伝統的な文化に関心を示さなくなるのである。明治の最初の二十年間で、不人気の横綱は能、大関は茶の湯といわれたくらいである。

しかし茶道関係者は手をこまねいていたわけではない。なんとか活路を見いだそうとして懸命になる。そして、茶の湯を礼法、礼儀作法の修練として広めてゆくことを思いつく。かくして茶の湯は、その存在理由を見いだし存続することが可能になる。同時に茶の湯は、決定的に茶道に変質するのである。

これとは別に、知識人が茶の湯を日本文化の典型として、そのすばらしさをさかんに説き始めるようになる。江戸時代の茶の湯は、裕福で、生活に余裕のある人々のたしなみであった。高級な文化的イメージがある。人々は、それをならうことになにがしかの優越感をかんじるであろう。こうして茶道と化した茶の湯は大衆のうちにひろまってゆく。

明治の中期以降、大正時代を頂点として、茶の湯を職業としない人々、数寄者の茶の湯（彼らは特権的な少数者であった）が隆盛をきわめるものの、昭和にはいってから茶道界をリードしたのは家元であり、江戸時代に確立した家元制度がかつてないほど巨大化する。かくして茶道人口五百万人という現代に至る。

二　明治以降の茶の湯

明治以降の茶の湯について、もうすこしくわしく見てゆくことにしよう。先にものべたように、江戸の末期から明治の初期にかけての茶の湯の家元は苦難の歴史を背負うことになる。パトロンたる大名、上級武士が没落する。一般民衆も茶の湯には目を向けない。茶の湯そのものの人気がなくなってしまう。ここで家元は、茶の湯が社会に役立つということを、一生懸命に宣伝する。茶の湯は遊びで

はなく、社会や国家に役立つものである。これがその主張である。

裏千家十一代家元玄々斎宗室の京都府への口上書には、次のように書かれている。

茶道の源意は忠孝五常を精励し、節倹質素を専らに守り、分限相応たる家務に怠らず、治世安穏の朝恩を奉戴し、貴賤衆人親疎の隔て無、交会し、子孫長久無病延寿の天恵を仰ぐ…

これは明治五年に書かれたものであるが、茶の湯が無益な遊びではなく、道徳的精神を本質とし、ひいては社会に役立つものである、という主張が明確に表現されている。

さらに家元は、いままでにはなかった流儀の全国組織をつくってゆく。そのことによって経済的な基礎が確立される。

また、献茶式がおこなわれだしたのもこのころである。献茶式とは、有名な神社仏閣に茶を献じる儀式である。現在でも盛んにおこなわれている。われわれは、高額な料金をはらってそれを参観する。

しかし改革はこのような経済的な面だけに係わったわけではない。たとえば、椅子にすわって茶席が楽しめるような作法（立礼（りゅうれい）とよばれるやり方）が新しくつくり出されたのも、この時代である。

やや遅れてではあるが、田中仙樵（一八七五～一九六〇）という人物が登場して茶の湯の改革を試みる。非常に個性的な人物である。明治の初期、茶の湯のもっとも衰退した時期に生まれたのであるが、茶の湯にいれあげて、裏千家十三代家元円能斎の高弟に弟子入りする。しかしそれでもあきたらず、円能斎直直に奥義までならうが、まだ満足せず、ともかく自分流に茶の湯がやりたいからといって、円能斎に自ら破門を申し出る。田中仙樵がおこなったもっとも革新的な改革は、書物にして茶の湯を公開する、ということである。茶の湯とは元来、口伝で教え、教わってゆくものである。それを出版物にして公開するという先駆的な事業をおこなったのである。仙樵がつくった会が大日本茶道学会である。この名称から容易に推測できるように、その茶の湯は国粋主義で、国家に役立つ茶道という性格をもつものであった。明治三十一（一八九八）年にかかれた仙樵の大日本茶道学会の設立趣意書には、次のようにある（原漢文）。

抑も我国の茶道は、珠光に始まり、紹鴎に中興し、利休に大成し、遂に以て一種の国粋的道学と成るに至れり。本来茶道の深みに於けるや、禅より起り、理を是に資り、礼を曲礼に定む。夫れ、然り而して之を大にしては則ち六合に渉り、而して窮尽す可らず。之を小にしては則ち修身斉家治国平天下の基と為る。

彼はあらゆる流儀をこえた茶道を広めるべく理想にむかって邁進してゆく。

近代の茶の湯で、もっとも注目すべきは数寄者の茶の湯である。近代以降茶の湯の名に値するのは、数寄者の茶の湯だけかもしれない。その他の茶の湯は、茶道というべきである。（実際、家元も茶の湯の改革者も、茶の湯ではなく茶道という言葉をつかっているのは、引用文を見てのとおりである。）明治中期から大正・昭和にかけて活躍した数寄者は枚挙にいとまないが、代表者をひとりあげるなら、鈍翁と号した益田孝（一八四八～一九三八）であろう。

なぜ彼らの茶の湯だけが茶道でなくて茶の湯なのか。それは、彼らが好き（これが数寄の原義だ）で茶の湯を行なっているからである。礼儀作法の訓練として役立つとか、社会や国家に役立つとか、そういう茶の湯に対して外的な目的のために茶の湯を行なっている（これが茶道）のではなく、自己目的的に茶の湯を行なっているからだ。

彼らの茶の湯を知るためには、やはり数寄者の一人であった高橋箒庵（一八六一～一九三七）がのこしている膨大な茶会記がある。どのように茶会が行なわれたか、その記録としての茶会記は昔からあるが、公刊されていて、しかもこれだけ読んで楽しい茶会記は他にないだろう。ただちに『東都茶会記』（熊倉功夫・原田茂弘校注により復刊されている）ほかについてみるべし。

三　大衆化する茶道

しかし、近代の茶の湯のなかで一番重要な出来事は、礼儀作法の訓練としての茶道の普及であり、大衆化である。（これは数寄者の茶の湯と平行に進行したことである。数寄者の数がいかに多いと言っても、社会全体からすれば、彼らはなみはずれた経済力をもつ特権的な少数者にすぎない。）これが直接、現代につながってくる。

茶の湯の現代化の指標となる点をいくつかあげてみよう。現在茶の湯（とそれがよばれるに値するかどうかは別として）を行なっているひとは、圧倒的に女性が多い。しかし以前は男性が圧倒的に多かった。この男女比が逆転するのは、大正末年から昭和初期にかけてのことであった。

また現在茶会といえば、ふつう大寄せの茶会である。すなわち、大人数の、チケットなどを介した不特定多数（数百人から千人に及ぶ）を客として開かれる茶会である。しかし、本来茶会といえば茶事のことである。ふつうはせいぜい五人程度の知り合いの客を相手に、狭い茶室（四畳半を標準とする）で懐石料理と共にお茶をもてなすものと、利休時代から決まっていたものである。しかし、茶の湯人口が数百万人ともなると、茶事とは別の様式の茶会が必要とな

ってくる。そこでうまれたのが大寄せの茶会である。これが流行するのは昭和十年以降である。

今日の茶の湯は、この延長線上にある。それは茶道家元が五百万人の茶道人口を統括する茶道である。今日ほど茶道が大衆化した時代はない。では、このことを単純によろこべるだろうか。この五百万人は顔のない大衆である。極端に言えば、顔をもっているのは家元だけである。数寄者にはそれぞれの顔があった。だれも石黒況翁と益田鈍翁を、小林逸翁と松永耳庵を混同しはしない。しかし五百万人がそれぞれ判別できる顔をもっているだろうか。みんなおなじことをやっている。あるいはおなじことをやるのが茶の湯だとおもっている。これは家元制度というものの特性から生じるものである。茶の湯の点前の型や、道具の好みは家元だけが決定し、また変更する権利をもっている。それに従わない弟子は破門される。家元制度があるかぎり、茶の湯は画一化し、顔のない茶人が茶道を反復するだけである。

四　茶の湯と俳句

現在、茶道と同様にひろく社会にひろまり、およそ五百万人もの人々が日々楽しんでいるものに、俳句がある。俳句とは、明治に入ってからつくられた造語であり、俳諧の発句の略である。俳諧が俳句になって、これほどまでに現代に大衆化したのである。それは、茶の湯が近代以降、茶道となって大衆化したのと一見非常に似た現象であるかのようにみえる。しかしその内実は、なんと両者は異なった変化であることだろう。

俳諧の歴史は、内的発展の歴史である。心敬や宗祇の連歌が宗鑑の俳諧連歌へと変化し、さらに貞徳や宗因をへて芭蕉が高度に芸術化させた。明治になって、さらにそれを子規が発句を一本立ちさせて、俳句というものをつくりだしたのである。連歌から連句、連句から俳句への三段の変化発展である。もちろん、子規の発明した俳句がこれだけ社会に普及したことについては、虚子の組織力を忘れてはならないが、いずれにせよ、時代と共に俳諧は見事に転生してきた。これを、堕落の歴史と言う人はいないだろう。

それに比べて茶の湯はどうか。おそらく室町時代、連歌師と茶人は場所を同じくして活躍していたにちがいない。能阿弥などの華麗な書院台子の茶の湯が利休の侘茶へと転換する。それを常識的な美へと芸術化した遠州くらいまでは、なんとか俳諧との比較も絵になるが、家元制度ができて如心齋が七事式をつくったあたりからもういけない。

そもそも茶の湯とは何か。茶を介して人と人とが心から交わりをかわすことが茶の湯ではないのか。茶を介してとは、具体的には茶会（茶事）をひらいて、ということである。（これに反対の向きは、

これを否定してみられるがよい。いったいどこでどのようにして人と人とがであうのか？）それが、茶の湯とは、茶の湯の点前の型の稽古、反復練習のことになってしまったのである。江戸中期から、茶の湯とは茶の湯の稽古をすることなのだ。

稽古こそ茶の湯である、という倒錯が、礼儀作法の修練としての茶の湯、すなわち茶道をつくりあげる。時代の変化がこれを助長する。稽古に比べれば、大寄せの茶会すら少ししかひらかれず、画一的な茶を点てる動作の習得こそ茶の湯であると勘違えした人々が、日々茶道の稽古に励んでいる。何をかいわんや。

たしかに、俳句の結社に入れば、はじめは主宰の俳句の模倣を余儀なくされるかもしれない。しかし、いつまでも同じ作風の句をつくり続けて、決して個性的な作品などつくってはいけません、といわれることはないだろう。それが茶の湯の世界ではおこっているのだ。

茶道に家元があり、流派があるように、俳句には結社があり主宰がいる。しかし、いわばしにせの結社はあろうが、俳壇の方がより拡散的で多様性があることは否定できまい。たとえば茶道界に、黛まどかのような人がいるだろうか。

茶の湯も俳句も、どちらも日本的な芸能・文芸であるといわれ、日常的な営み、情景のなかに美を見いだし、ささやかな営為になごみを求め、生きがいをみいだすものである。茶道人口・俳句人口ともに五百万といわれ、どちらも隆盛をきわめているのにどうしてこうもちがうのか。

一方には子規がいて、一方にはそれに相当するような人物がいなかった。たしかにそのようなこともおおきな原因のひとつであろう。

それは、別の面から言えば、形式上・形態上の近代化をなしとげたか、否かのちがいでもある。俳諧は、明治時代において、連句から俳句へと、みごとな形式上の内的発展をなしとげたのである。茶の湯はといえば、椅子に座って茶を点てる立礼式の考案、田中仙樵による点前の書物による公開、茶事にかわる大寄せの茶会等も、発句の独立に比べれば、部分的な改革にすぎなかった。もちろん、俳句は紙と筆さえあればできるのにたいして、茶の湯の場合ははるかに多くの、ということはある程度高額の道具が必要である。形式的な改革の困難は、公平にみて、茶の湯の方が困難ではあるだろう。しかし改革が現段階以上には不可能である、とはかんがえられない。最後に茶の湯の未来のための提言をおこなってみたい。

五　茶の湯の未来のために

多くの人が茶の湯を誤解している。問題なのは、茶の湯をやっていない人ばかりではなく、茶の湯を行なっている多くの人々も、茶の湯を誤解しているという事である。その誤解のほとんどは、点前

の型に茶の湯の本質があるとかんがえることからはじまっている。まず、このような誤解を解かねばならない。茶の湯の本質は点前の型の習得にあるわけではない。それは、茶会での演出上の一要素にすぎない。それ以上でもそれ以下でもない。茶の湯にとっていちばん大切なこと、それがなければ茶の湯が茶の湯ではなくなってしまうもの、それは茶を介して人と出会うことである。これにくらべれば点前の型も礼儀作法も、茶席の道具も、媒介や媒体にすぎない。これは茶の湯における人間主義（ヒューマニズム）である。

しかるに、多くの人は点前の型の習得こそが茶の湯であるとかんがえる。本末転倒もはなはだしい。点前の型の習得が茶の湯だとかんがえるから、茶の湯の稽古が茶の湯そのものだという、同様に転倒・倒錯したありかたが生じる。茶の湯とは茶の湯の稽古をすることである、と。こんな馬鹿なことがありえようか。茶の湯とは茶会を開いて人と交わることである。そのために点前の練習をするのである。いま、こんな馬鹿なことがありえようか、とかいたが、このような馬鹿なことが蔓延しているのが現代の茶道なのである。本番よりも練習に精力をつぎこむこと、本番の試験より、予備校での受験勉強が大切だ、といっているのが現代の茶道なのである。この倒錯の根源には、点前の型の習得至上主義がある。誤解をおそれずに、茶の湯は型の芸能ではない、と明確に力説する必要があるのではなかろうか。

点前の稽古、その他の技術は、すべて茶会・茶事を開くことを目的として伝授されるべきである。稽古のための稽古というのは、あきらかな倒錯である。

すでに筆者は茶の湯に関する根本的な思想を述べた。以下そこから派生する諸提言を列挙してゆく。

一、茶の湯を反復の相においてとらえるのではなく、創造の相においてとらえること。この点は、特に俳句から学ぶことは多い。

一、茶の湯をおこなう各人が、おのおの自分の茶の湯をつくること。顔のない大衆から、顔のある大衆へ。顔はたしかに奪われている。しかし、奪われていることの自覚がないのが最大の問題である。この点に関しても、前項とおなじく俳句から多くを学ぶことができるであろう。

一、茶の湯の歴史的な美意識から、新しい美意識の確立へ。名物道具からの解放。箱書き、伝統的権威にもとづく価値からの解放。日本全国、全世界でつくられている陶器その他の道具を積極的に活用すること。おのおのが自分なりの美意識を持ち、茶会を開くことを念頭において茶の湯に励めば、だれでもが茶会を開けるようになるであろう。茶会には道具が必要である。それも各人が、伝統的価値観にとらわれずにまめに道具を収集すれば、茶席を開くことは十分可能である。現在のように、一席数百万円以上かかるなどというのが異常なのである。

一、同志をつくること。新しい人間関係を組織すること。茶の湯は一人ではできない。この点が、作品を一人でつくることができる俳句とのおおきなちがいである。茶の湯の大切な要素に、社交ということがある。点前の型などよりよほど重要な要素である。人間主義における茶の湯は、特権的な個人が支配する茶道（それゆえ茶道は人間主義的ではない）とは異なった人間関係を必要とする。流儀のなかだけで通用しているものなど、なにほどでもないことを認識すべきである。

人間主義は近代の、あるいは近代的思想の特徴である。茶の湯が未来のこととして人間主義を必要としているのであれば、茶の湯において真の近代はいまだ到来していないというべきであろう。

しかしまた、茶の湯は個人ではできない。複数の人間、集団でしかやりようのないものである。世代をこえてつきあい、人々が遭遇するものである。例えば、おばあさんと高校生の男の子に出会いを用意し、共に楽しむことができるような場をつくり出すのが茶の湯である。茶の湯の他にもこういったものがたくさんある、と言えるだろうか？そして、俳句のように、だれでもが日常的に心を和ませ、楽しみ、またこころの傷を癒したりできるものである。ここに個人主義的な人間主義を越える契機がある。茶の湯はいまだ近代以前の段階にあるとはいえ、近代を越える契機もそこに内包しているのである。

主要参考文献

熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、一九八〇年
末宗廣『茶人の研究』（末宗廣著作集Ⅱ）思文閣出版、一九八一年
戸田勝久『近代の芸文と茶の湯』淡交社、一九八三年
『茶道聚錦　第六巻　近代の茶の湯』小学館、一九八五年
田中仙翁『茶を学ぶ人のために』小学館、一九八八年
熊倉功夫『近代数寄者の茶の湯』河原書店　一九九七年
田中仙堂『茶道のイデア』茶道之研究社、一九九七年